

悉曇文字の字形から見た


『悉曇字記』の問題点
——語頭の長ī, cha, dhaを表す文字の字形を
中心に——

橋 本 貴 子

1. は じ め に

古代インドで使用されていたブラーフミー文字 (Brāhmī) から4世紀頃に北方系のグプタ文字 (Gupta script) が成立し、その流れをくむシッドハマトリカー文字 (Siddhamātrkā) が6世紀から10世紀にかけて北インド全域で用いられた。この文字は仏教とともに東アジアに伝えられ、「悉曇文字」と呼ばれている⁽¹⁾。

悉曇文字の字形の多くは導入元である北インドの字形の流れを汲んでいるが、語頭の長ī, cha, dhaを表す文字として伝えられている字形の一部のものは、不思議なことに北インドの字形と合わない。本稿の目的は、それら字形の由来について検討を行うことにある。またこれらの字形に着目することで明らかとなる悉曇学書の文献学の問題点についても論じることとする。

なお、ローマナイズ表記の「i」と「ī」は見分けが容易でないため、本稿では分かりやすさを重視してそれぞれ「短i」、「長ī」と呼ぶことにする。また実際の写本での字形を示す必要があると判断される場合を除き、悉曇文字の表記には活字体を用いる⁽²⁾。語頭の短iおよび長īを表す悉曇文字のうちの4種については、文字中の二つの丸が実際の写本では二つの点になっている場合もあるが、丸か点かの違いが本稿での議論にとって重要な意味を持つことはないため、以上の字形で代用する。

2. 『悉曇字記』に見える語頭の長 i, cha, dha を表す文字

『悉曇字記』⁽³⁾ (以下、『字記』) は、唐代に漢人僧の智広が南天竺出身の般若菩提というインド僧のもとに行って教わった悉曇文字とその発音について記したものである。

智広および般若菩提の経歴については幾つかの説が出されているが、未だ定説と呼ぶべきものはない⁽⁴⁾。『字記』の成立時期については、この書を初めて日本に請来した空海の『御請来目録』(大正蔵No. 2161)に「悉曇字記一卷」(T 55 : 1064a27)と記載があり、806年以前であることは間違いない。馬淵1984 : 108は『字記』の音訳漢字が7世紀末のものとは一致することから、7世紀末の成立と推定する。しかし『字記』には更に別系統の音訳漢字が記されており、その音訳方法は明らかに8世紀以降の特徴を示している⁽⁵⁾。よって、成立時期を7世紀末にまで遡らせることができるかどうかは疑問であり、現時点では8世紀頃の成立とするのが妥当と思われる。


『字記』は日本悉曇学の大成者である安然(平安前期の僧)がその価値を高く評価し、空海請来ということもあって、日本悉曇学では研究の中心課題となった。数多くの写本・刊本が伝わり、注釈書類も100種以上存在するという(馬淵1984 : 1403)。

2.1. 語頭の短 i, 長 ī を表す文字




寛治7年(1093)写本(以下、「寛治本」)『字記』では短 i と長 ī を表す文字が次のように説明されている(羅1976 : 1141)。

短伊字 上聲。聲近於翼反。別體作。

(短 i の字 上聲。發音は於翼反に近い。別體はに作る。)

長伊字 依字長呼。正作。

(長 ī の字 字に依って長く發音する。正しくはに作る。)

短 i については掲出字、注釈ともに他の写本において異同は見られない。長 ī については、掲出字は写本間で共通しているが、注釈中の「正作」は写本によって異同がある。元永元年(1118)写本(以下、「元永本」)では「正作」(『高山寺』: 28)と2種類の字形が

挙げられており、文治2年(1186)写本(以下、「文治本」)では「別體作𑖇」(『高山寺』:118)とあり、𑖇を「別體」即ち異体字と見なしている。大正蔵本(No. 2132。『縮刷大蔵經』本を底本とし、岩崎文庫蔵大治5年(1130)写本によって対校したものは文治本と同じく「別體作𑖇」(T 54: 1187c)となっている。

ところで、以上の長ī𑖇という規定には問題がある。𑖇は文字史的には𑖇ととも短iを表すはずだからである。管見の限りでは、この点についての指摘はこれまで行われていないようである⁽⁶⁾。

北インドにおける語頭の短iを表す文字の字形は、早期のブラーフミー文字における三つの点を三角形に配する形(𑖇)から、下方の一点が湾曲した形(𑖇、𑖇)に変化した。インド中部において𑖇は5世紀末～7世紀の資料に現れ、8世紀以降は𑖇が優勢となる(Dani 1963: Pl. XIIIa)。一方、ガンジス河中流域および東インドにおいても𑖇がより早く現れるが、この字形は𑖇の出現後もなお見られる(Dani 1963: Pl. Xa, Pl. XIa)。なお、北インドではこれらの他に、短iを表す文字として左側に二点、右側に垂直線を配した字形(𑖇)および上方に横線、その下方に二点を配した字形(𑖇)も使用された(Dani 1963: Pl. Xa)。一方、語頭の長īは、5世紀以降の北インドにおいて垂直線の両側にそれぞれ点を配した字形(𑖇)で表された(Dani 1963: Pl. Xa, XIa, XIIIa)。

字形から見て、短iを表す𑖇と𑖇は悉曇文字𑖇と𑖇の祖型であり、長īを表す𑖇は悉曇文字𑖇や𑖇の祖型と考えられる。しかし、すでに見たように『字記』は𑖇を長īと規定しており、北インドの状況と明らかに矛盾している。

2.2. chaを表す文字

chaを表す字形にも問題がある。chaに関する寛治本『字記』の説明は次の通り(羅1976: 1144)。

𑖇 車字 昌下反。音近倉可反⁽⁷⁾。別體作𑖇。

(chaの字 昌下反。發音は倉可反に近い。別體は𑖇に作る。)

以上について元永本(『高山寺』: 32)、文治本(『高山寺』: 122)とも

に異同は見られないが、馬淵2006：11によると、版本では掲出字と異体字の字形が逆になっているという⁽⁸⁾。大正蔵本での表記も写本とは逆であり、掲出字が𑖇，異体字が𑖆となっている（T 54：1188a）。

1世紀以降の北インドではchaが𑖆と書かれていた（Dani 1963 Pl. VIa, VIIIa, IXa, Xa, XIIa, XIVa）。これは悉曇文字𑖆および𑖇の祖型と考えられる。一方『字記』がchaの掲出字として挙げる𑖆は明らかにcchaを表す字形（𑖆caとcha𑖇の結合文字）であり、疑問が持たれる⁽⁹⁾。

2.3. dhaを表す文字

1世紀以降の北インドではdhaは𑖆や𑖇と書かれていた（Dani 1963：Plate VIa, VIIIa, IXa, Xa, XIa, XIIa, XIIIa, XIVa）。『字記』には見られないが、dhaを表す悉曇文字𑖆および𑖇は北インドの字形に由来すると見られる。

一方、『字記』諸写本におけるdhaの字形は次のようになっている。

寛治本：𑖆（羅1976：1144）

元永本：𑖆（『高山寺』：33）

文治本：𑖆（『高山寺』：123）

元永本と文治本の画像について、掲載許可をくださった高山寺に感謝申し上げる。




以上の字形はいずれも終筆が下に向かって時計回りに曲線を描いており、pha𑖆との見分けが難しい。北インドの字形や悉曇文字𑖆𑖇において終筆が上に向かって反時計回りに曲線を描いているのとは明らかに異なる。これら『字記』諸写本に見えるdhaの字形を、本稿では一括して𑖆という字形で代表させる。大正蔵本でもこの字形が使われている（T 54：1188a）。この字形について田久保・金山1981：186は『字記』の誤写に始まった誤伝であると考え、種智院大学密教学会編2015：97は「日本で変遷したもの」と推測している。

2.4. 朝鮮半島に伝わる悉曇資料





朝鮮半島に伝わる悉曇資料にも、長𑖆𑖇，cha𑖆という字形が見られる。

高麗大藏經所収『瑜伽金剛頂經釈字母品』⁽¹⁰⁾では、短 i, 長 ī, cha, dha が次のように表記されている。






短 i , 長 ī , cha , dha  (線装書局影印2004 : 286-287)

この悉曇文字の書体は随分独特であるが、長 ī は明らかに  であり、cha についても  と同系の字形であることが見て取れる。一方、dha を表す字形の終筆は上に向かって反時計回りに曲線を描いているように見え、 と同系と思われる。

また『真言集』に含まれる悉曇章にも同種の字形が見られる。『真言集』については韓国国立中央図書館のウェブサイト (<http://nl.go.kr/nl/>) 内で数種類の版の画像が閲覧可能であり(2018年10月25日確認)、うち隆慶三年(1569)安心寺版重刊の刊記を持つ『真言集』⁽¹¹⁾、順治15年(1658)重刊の神興寺版、乾隆45年(1780)刊行の『重刊真言集』、嘉慶5年(1800)刊行の望月寺版『重刊真言集』に2種類の悉曇章が含まれている。そこに見える長 ī, cha, dha の字形の特徴は、高麗大藏經所収『瑜伽金剛頂經釈字母品』の字形とほぼ同じである。

これら朝鮮半島に伝わる悉曇資料と『字記』との関係は明らかではないが⁽¹²⁾、これらの資料中にも長 ī , cha  という字形が見られることから、『字記』の長 ī , cha  という字形はいずれも日本における伝承の過程で生じた誤りではなく、中国で伝承されていたものと考えられる。

3. 日本に伝わる悉曇写本による検討

前章では、『字記』に見える長 ī , cha , dha  が北インドの字形と合わないことを指摘し、また朝鮮半島に伝わる悉曇資料にも長 ī , cha  という字形が見られることを確認した。

筆者はインドの文字史を専門とする者ではなく、問題の字形がインド側に根拠を持つかどうかについて適切に検討する能力を持ち合わせていない。しかし日本に伝わる悉曇資料を用いて問題の各字形について調査を行い、それに基づいて幾つかの考察を試みることは可能ではないかと考える。

以下では、唐写本および入唐僧によって請来されたと伝えられる

悉曇章類での表記を見ていくことにする。なお、利用する資料の大半は影印本として出版されているものに限られるが、それでも問題の字形について得られる情報は決して少なくないと思える。

3.1. (公財) 東洋文庫蔵『梵語千字文』

この資料は『梵千』：1-47に影印が収録されている。石塚晴通氏と小助川貞次氏の解題（『梵千』：77-79）および石塚2015：334-337によると9世紀頃の書写で、原旋風装（今は卷子装）であること、料紙が日本の一般的な楮紙ではなく構（穀）紙であることから唐写本とされる。またこの資料に書かれた悉曇文字の表記が後世のものよりはるかに正確である（松本2007：35；『梵千』：77）ことは、この資料が原本と近い関係にあり、唐代悉曇学の伝承を比較的好く反映していることを示唆している。大正蔵本（T54, No. 2133）は2種類のテキストを収録しており、うち1本（T54：1190a-1197a）はこの東洋文庫所蔵本（以下、「東洋文庫本」と略す）を底本にし、もう1本（T54：1197a-1216b）は安永2年刊本を底本とする。

(1) 語頭の短iと長ī

東洋文庫本では語頭の短iが𑖦と𑖧の両方で表記される⁽¹³⁾。その状況を以下に整理して示す。悉曇文字の読みについてはDLSC⁽¹⁴⁾を参考にした。なお東洋文庫本の出典における数字は『梵千』に示された行数を表す。また東洋文庫本を底本とする大正蔵本の字形は東洋文庫本の字形と一部異なるため、それらの字形についても合わせて示す。大正蔵本の校本情報（T54：1190, 脚注2）には「㊦東京東洋文庫蔵本」とあるのみで、対校本の情報はない。そうであるならば大正蔵本は東洋文庫本の翻刻であるはずだが、実際には東洋文庫本の字形を完全に再現したものではない。

東洋文庫本	大正蔵本
𑖦i(ha)「此」（『梵千』40; DLSC: 315, No.146)	𑖦(1190c23)
𑖧i(kṣu)「蔗」（『梵千』103; DLSC: 320, No.412)	𑖧(1192a15)
𑖧i(cchati)「聽」（『梵千』154; DLSC:324, No.650)	𑖧(1193a27)

𑖀i(ccha)「欲」(『梵千』183; DLSC: 327, No.792)	𑖀 (1193c25)
𑖀i(ṣṭa)「愛」(『梵千』190; DLSC: 327, No.829)	𑖀 (1194a11)
𑖀i(ṣṭa)「愛」(『梵千』279; DLSC: 335, No.242)	𑖀 (1196a9)

一方、長 ī は𑖀と表記されている⁽¹⁵⁾。大正蔵本の表記も同様である。

𑖀ī (ryapatha)「儀」(『梵千』160; DLSC: 325, No. 676)

(2) cha

直前に語句の切れ目を示す記号𑖀があるにも関わらず、語頭のchが悉くcch𑖀と書かれている。大正蔵本の表記も全てcch𑖀となっている。

𑖀 cchā(yā)「陰」(『梵千』7; DLSC: 313, No. 5)

𑖀 ccha(ttra)「蓋」(『梵千』25; cf. DLSC: 314, No. 85, cchettra)

𑖀 ccha(ya)「影陰」(『梵千』43; cf. DLSC: 316, No. 163, cchāyā)

𑖀 cchi(tr)「截」(『梵千』82; cf. DLSC: 319, No. 327, cchitya (B. cchitr), ch. chitr (= chitta))

𑖀 cchi(nda)「絶」(『梵千』140; cf. DLSC: 323, No. 583, cchana (B. cchinda), ch. chinna)

𑖀 cchi(dra)⁽¹⁶⁾「穴」(『梵千』151; DLSC: 324, No. 632)

𑖀 ccho(tika)「彈」(『梵千』176; cf. DLSC: 326, No. 755, cchaṭika)

𑖀 ccha(bhita)「怖」(『梵千』275; DLSC: 335, No.223)

(3) dha

dhaについては𑖀と𑖀の両方が使われている。活字体では写本の字形を十分に代替しきれないため、『梵千』より該当部分を抜粋する。画像の掲載について許可をくださった(公財)東洋文庫に感謝申し上げます。また短iの場合と同様、大正蔵本の一部の字形は東洋文庫本と異なるので、それらも合わせて示す。

東洋文庫本	大正蔵本
𑖀(dr)dha「操」 ⁽¹⁷⁾ (『梵千』93; cf. DLSC: 320, No. 376, drphpha (B. drpta), ch. drḍdha)	—

𑖀 (dr)dha 「操」 (『梵千』 95; cf. DLSC: 320, No. 376, drphpha (B. dr̥pta), ch. dr̥d̥dha)	𑖀 (T54: 1191c30)
𑖁 (dr)dha 「堅」 (『梵千』 289; cf. DLSC: 336, No. 296, dr̥pha, ch. dr̥dha)	𑖁 (T 54: 1196a30)

3.2. 悉曇章類

次に以下に挙げる悉曇章類での表記状況を見ていくことにする。

- (1) 『悉曇章』 (東寺金剛藏第201箱19号)
- (2) 『悉曇章』 (東寺金剛藏第201箱20号)
- (3) 円仁『在唐記』の字母釈 (叡山文庫真如藏内典16-1)
- (4) 『悉曇章』 (東寺金剛藏第201箱17号)
- (5) 梵夾『大日経真言・十二天真言』 (園城寺藏)
- (6) 『般若心経并尊勝陀羅尼』 (東京国立博物館藏)


(1) は円仁 (794-864) が唐・開成4年 (839) に揚州で全雅より伝与された悉曇章の伝写本で、嘉慶2年 (1388) に書写されたものである⁽¹⁸⁾(馬淵1984: 72; 馬淵2006: 14-17)。馬淵2006の巻頭影印4-6より該当部分を抜粋する⁽¹⁹⁾。

(2) は巻首に賢宝 (1333-1398) が「靈巖寺和尚請来歟」と記していることから、円行請来かと言われてきた。しかし馬淵1997: 3-4は、この写本が『悉曇藏』巻三に記述される「円行将来」の悉曇章の構成と一致しないという理由から、円行請来説を否定していた。そして馬淵2006: 17-25では、この写本は円仁が唐長安の大安国寺で元簡より受けた悉曇章であり、朱筆の万葉仮名は円仁によって書かれたものと推定している。

この馬淵氏の円仁請来説については、肥爪2007: 68が「今後、厳密な筆跡鑑定とともに、多方面からの、当資料の検討が必要になって来るであろう」と指摘するように直ちに受け入れられるものではない。しかしながら馬淵2006: 18-19が指摘するように、悉曇文字の字体が日本で行われた字体とかなり相違し、しかも木筆で書かれていることから、この写本が中国で書かれた可能性は高いと思われる。馬淵2006の巻頭影印1-3より該当部分を抜粋する⁽²⁰⁾。

- (3) は円仁の著述とされる『在唐記』の中間部に見えるもので、

円仁が在唐中に南天竺出身の宝月三蔵より伝授された悉曇文字の発音に関する記録である(住谷2008: 124)。叡山文庫蔵の『在唐記』写本、真如蔵内典16-1(以下「叡山文庫真如蔵本」)⁽²¹⁾の第22-26紙に収録される字母積部分より、該当部分を抜粋する。画像の字形はいずれも筆者が叡山文庫にて写本の複写本(原本は状態が悪く閲覧できないため)を見て模写したものである。

なお淳祐(890-953)の書写である大津・石山寺蔵『 (siddham) 字母』(石山寺文化財総合調査団編 2004: 235-248所収)の巻末には、「円仁記」の字母積が収録されている。そこに見られる問題の字形は上記叡山文庫真如蔵本の字形と基本的に一致しており、叡山文庫真如蔵本が本来の字形を留めている可能性は高い。

(4)は円珍(814-891)が仁寿3年(853)に福州で般若多羅より受けた悉曇章の伝写本で、永和4年(1378)に書写されたものである(馬淵1984: 84; 『集成』解説篇: 206-207; 馬淵2006: 36-37)。馬淵2006の巻頭影印7-8より該当部分を抜粋する⁽²²⁾。

(5)は円珍が大中年(854)に福州開元寺において般若多羅から授けられたと伝えられる唐写本である(『集成』解説篇: 150)。この資料は悉曇章ではないが、字母品のような部分があり、その中に短iと長īの字形が確認できる。『集成』図版篇: 26-29の図版より該当部分を抜粋する。

(6)は「法隆寺貝葉」と呼ばれる写本で、Müller and Nanjio 1884において6世紀書写の貝葉写本として紹介され、翻刻出版された。しかしその後の研究では書体面から8~9世紀の書写と推定されている(干潟1939: 49-57; Dani 1963: 151-154; 松田2010: 129)。また金山正好氏および松田2010は、写本の素材は貝葉ではなく書体や筆致にも問題があると指摘し、中国または日本で貝葉を真似て作られたものと推定する(田久保・金山1981: 55-56, 金山氏による補筆部分; 松田2010: 128-129)。矢板2001も実見の上で当写本に書かれた漢字と悉曇文字とが同じ墨を用いているように見えること、通常のインドの写本には見られず還梵に起因すると思われる誤写が見られることから、写本が東アジアで書かれたとの説を支持する(但し写本の素材につい

ては貝葉であると見ている)。松田2010：129は書写年代について9世紀を遡ることはないと推定するが、仮に9世紀頃の書写であるとしても、この時期の悉曇写本としては貴重であり、唐代中国における悉曇文字の伝承状況を比較的よく伝えてしていると予想されるため取り上げることにした。写本の内容は般若心経、仏頂尊勝陀羅尼、字母表の順になっている。『集成』図版篇：2の図版より字母表中の該当部分を抜粋する⁽²³⁾。







なお、以上の資料に空海関係の悉曇章類が含まれていない理由を説明しておく。まず空海『梵字悉曇字母并釈義』は後で指摘するように悉曇文字の字形面に文献学的な問題が存在し、現時点では成立当時の字形を知ることができない。次に空海作と伝えられる『梵字悉曇章』および『大悉曇章』⁽²⁴⁾については空海作ではないとの説があり(馬淵1984：147-149；馬淵2006：33-34)、現時点では由来に疑問が持たれるため取り上げないことにした。



以上の諸写本における短 i, 長 ī, cha, dha の字形は以下の通りである。画像掲載の許可をくださった東寺、園城寺、(株)東京美術に感謝申し上げる。

	短 i	長 ī	cha	dha	出典
(1)					馬淵2006：巻頭影印 4
(2)					馬淵2006：巻頭影印 1
(3)					叡山文庫真如藏本『在唐記』
(4)					馬淵2006：巻頭影印 7
(5)			—	—	『集成』図版篇：29 (21オ)
(6)					『集成』図版篇：2

3.3. 問題の字形についての考察

(1) 語頭の短 i, 長 ī を表す文字

東洋文庫蔵『梵語千字文』と悉曇章類において短 i は  或いは  と表記され、長 ī は , , ,  と表記されている⁽²⁵⁾。

すでに述べたように、文字史的には  は本来短 i を表すはずである。本稿で用いた資料に偏りがあって  が長 ī に対応する例が見つ

からないという可能性は否定できないが、上で見た悉曇写本では𑖇は専ら短iを表している。これらの状況から『字記』における長i𑖇という規定は明らかに異質であることが分かる。

長iを𑖇と表記する、やや特殊な悉曇章がインドから中国に伝えられており、『字記』の規定はそれに基づいたものと解釈できるかもしれないが、現時点ではそれを支持する資料が見出されない⁽²⁶⁾。



もし長i𑖇という規定がインド由来でないとすれば、中国悉曇学の一部において生じた誤りである可能性を考える必要がある。悉曇文字の長iを表す字形の一つに、上記(4)東寺金剛藏第201箱17号に見える𑖇がある。これと同じ字形がSander 1968 : Tafel 21のGilgit / Bamiyan-Typ II (ギルギット写本に見られる、シッダマートリカー文字と同系の書体)に長iを表す文字として見える。この字形は𑖇に形が似ており(上述したように、文字中の二つの丸が実際の写本中では二つの点になっている場合もある)、もし長iが𑖇で表記されるようになった理由を字形上の混乱に求めるとすれば、𑖇や𑖇に比べるとこの字形に由来すると考えたほうがより蓋然性が高いと思われる。

(2) chaを表す文字





東洋文庫本『梵語千字文』では語頭のchが悉くcch𑖇と書かれている。一方、悉曇章類においてchaは𑖇または𑖇と書かれている。


兪1984 : 260は『梵語千字文』における問題の表記𑖇について綴り字上の習慣であると説明するが、その際に語頭のchが外連声によってcchに変化する規則(Whitney 1896 : §227)を引き合いに出しているのは問題である。この資料は梵語の語形を千字文の配列に従って並べただけの謂わば「語彙集」であり、またすでに述べたように各語形は語句の切れ目を表す記号によって区切られている。この状況において上記の外連声の規則が適用されていると考えるのは難しいと思われる。



辛嶋静志教授のご教示によると、中央アジア写本(5～8世紀)、ギルギット写本(7～8世紀)、ネパール写本(11世紀以降)などの梵語写本では、文頭であっても外連声とは関係なく語頭のchはcchと書かれる(但し韻律的には短音と見なされる)ことが多く、chと書かれ

ることは少ないそうである⁽²⁷⁾。これら写本に用いられている書体は多岐にわたるが、上で触れた Gilgit / Bamiyan Typ II もその中に含まれる。『梵語千字文』における cch という表記は連声の規則によるものではなく、このような梵語写本における表記を受け継いだものである可能性がある⁽²⁸⁾。また『字記』における cha  という規定にも梵語写本での表記状況が関係しているかもしれない。つまり、唐代の中国悉曇学においては当時の梵語写本での表記に基づいて  が cha を表す文字として理解され、それが『字記』での規定に反映しているのではないだろうか。

(3) dha を表す文字

東洋文庫本『梵語千字文』では  と  の両方が使われており、悉曇章類においても 、 と両様の表記が見られる。

問題の字形  については、悉曇写本の状況から唐代の中国悉曇学において比較的広く伝承されていたと推測される。従って、この字形は必ずしも『字記』に始まったものとは限らず、むしろ唐代の中国悉曇学における伝承に基づいて『字記』が採用したのと考え余地も十分にある。

筆者は  と似た字形を 6～10 世紀頃の北インドの文字資料中に見出すことができないが、現時点ではこの字形を誤伝と考えることには慎重にならざるを得ない。円仁と円珍が請来したとされる悉曇章に問題の字形  が見られ、仮にインド僧より伝授されたとの説に従うとすれば、インド由来の可能性が出てくるからである。この点については今後も引き続き検討する必要があると思われる。

4. 他資料に引用される『字記』の字形

問題が複雑になるのを避けるため、ここまで敢えて言及しなかったのだが、他の悉曇学書に引用された『字記』の字母釈部分に見える語頭の長 i, cha, dha を表す文字の字形は、すでに見た『字記』諸写本の字形と異なっている。

安然『悉曇藏』巻五は 2 種の『字記』から字母釈を引用している。説明の便宜上、安然が先に引用する『字記』を「A 本」、そして次に

「異本」として引用する『字記』を「B本」とそれぞれ呼ぶことにする。影印本として閲覧可能な巻五の写本のうち書写年代の最も早い横川楞嚴院蔵応徳2年(1085)写本⁽²⁹⁾(以下、「応徳本」)を見ると、A本からの引用部分では長ī𑖇(『悉曇具書』:83)となっている。この字に対する注釈では「正作(正しくは~に作る)」と異体字を示す表現が見られるものの、肝心の異体字は記されていない。またA本からの引用部分には子音を表す文字は一切書かれていないため、chaとdhaの字形は確認できない。一方、B本からの引用部分には長ī𑖇, cha𑖇, dha𑖇(『悉曇具書』:84)とある。

石山寺所蔵『延暦交替式』の紙背に書写される『南天竺般若菩提悉曇十八章』(以下、『十八章』)は、『字記』からの引用とそれに対する解説よりなる資料である。この資料の著者および筆写者については沼本克明氏と馬淵和夫氏の間で異なる説が提出されているが⁽³⁰⁾、平安中期頃に書かれた『字記』の解説書の写本と考える点は両者の間で共通している。この写本の第3～4紙に見える字母積は『字記』からの引用であり、そこには長ī𑖇, cha𑖇, dha𑖇(『石山寺』:18-20)と書かれている。なお、この資料では長ī, chaを含む幾つかの文字の注釈中に「別體作(別體は~に作る)」と異体字を示す旨の表現が見られるが、いずれにおいてもその直後には異体字が記されていない。

この『十八章』に引用される『字記』の字母積部分は安然『悉曇蔵』巻八のものと同様であることが沼本氏によって指摘されている(『石山寺』:414)。そこで東寺金剛蔵蔵天慶5年(942)写本(以下、「天慶本」)『悉曇蔵』巻八の字母積を見ると、長ī𑖇, cha𑖇, dha𑖇(『集成』図版篇:140-141)となっており、『十八章』の字形と一致する。奈良国立博物館蔵平安後期写本『悉曇蔵』巻八⁽³¹⁾の字形も同じである。応徳本に書かれる長īとchaの字形は天慶本と同じであるが、dhaは𑖇と書かれており(『悉曇具書』:141-142)天慶本と異なる。

また淳祐自筆とされる無為信寺蔵写本『悉曇集記』巻中所引の『字記』の字母積では長ī𑖇と書かれており、異体字については「正作𑖇」とある⁽³²⁾。この資料におけるchaとdhaの字形は、公開されて

いる画像に含まれていないため確認できない。

更に江戸時代に悉曇写本を博搜し研究した浄厳(1639-1702)の『**𑖀𑖄𑖅** (siddham) 三密鈔』(T 84, No. 2710) 卷上には悉曇文字の異体字が整理されており(T 84 : 722b-723c。この部分のみ天和2年(1682)刊本の影印)、その中に長īを表す字形の一種として「**𑖀** 智廣」(T 84 : 722b)が挙げられている。

以上の資料における長ī, cha, dhaの表記状況(注釈中の異体字に関する説明も合わせて示す)を整理し、以下の表を作成した。

	長ī	cha	dha
『字記』写本	𑖀 正作 𑖀	𑖄 別體作 𑖄	𑖅
応徳本『悉曇蔵』卷五所引『字記』A本	𑖀	—	—
応徳本『悉曇蔵』卷五所引『字記』B本	𑖀 正作 𑖀	𑖄 ⁽³³⁾	𑖅
無為信寺蔵『悉曇集記』卷中所引『字記』	𑖀 正作 𑖀	—	—
『 𑖀𑖄𑖅 (siddham) 三密鈔』卷上「智廣」	𑖀	—	—
天慶本『悉曇蔵』卷八	𑖀 正作 𑖀	𑖄 別體作 𑖄	𑖅
応徳本『悉曇蔵』卷八	𑖀 正作 𑖀	𑖄 別體作 𑖄	𑖅
『南天竺般若悉曇十八章』	𑖀 正作—	𑖄 別體作—	𑖅

天慶本『悉曇蔵』卷八のchaの注釈部分に見える字形について、画像の掲載許可をくださった東寺に感謝申し上げる。

以上の中で特に長īの字形に見られる異同(**𑖀**~**𑖀**)について疑問が持たれるが、異同の理由について考察を行うには資料が不十分であるため、問題として指摘するに止めておく。『字記』や『悉曇蔵』等に関する本格的な文献学的研究において検討されるのを待ちたい。

いずれにせよ、以上の諸資料に引用される字形から、平安時代には長ī**𑖀**または**𑖀**、cha**𑖄**、dha**𑖅**と書かれた『字記』が存在していたことが分かる。これによって『字記』の成立と伝承について以下の二つの解釈が可能になると思われる。

一つは、『字記』撰述時には長ī**𑖀**または**𑖀**、cha**𑖄**、dha**𑖅**と書かれていたが、伝写の過程で一部の写本に問題の字形が取り込まれて今日まで伝えられ、本来の字形は他資料に引用の形でのみ残ったというものである。

もう一つは、中国悉曇学の一部で伝承されていた問題の字形が『字記』撰述時に取り込まれ『字記』諸写本に伝えられたが、今日に伝わらない一部の写本では北インドの字形または他の悉曇章に基づいて訂正が行われ、その訂正版の字形が他資料に引用されたというものである。

現時点ではどちらの解釈も可能と考える。『字記』を著した智広はインド僧（但し「南天竺」出身）である般若菩提から直接悉曇文字を教わったのであるから、本来は北インドの標準的な字形を記していたのではないかと思う一方、智広が当時の中国悉曇学において伝承されていた問題の字形を採用したということも十分有り得ると思うからである。

付言として、空海『梵字悉曇字母并积義』についてもその写本の字形と『悉曇藏』に引用される字形とが大きく異なることを指摘しておく。承保3年（1076）写本『梵字悉曇字母并积義』では短 $i \text{ 𑖀}$ 、長 $i \text{ 𑖁}$ 、cha 𑖃 、dha 𑖄 （『選集』：11-13）となっている⁽³⁴⁾。一方、『悉曇藏』巻五「空海悉曇积義云」では短 $i \text{ 𑖀}$ 、長 $i \text{ 𑖁}$ 、cha 𑖃 、dha 𑖄 （『悉曇具書』：74）と書かれている。この点についても今後の研究が待たれる。

5. おわりに

本稿では『字記』における語頭の長 i 、cha、dha を表す文字の字形が6～10世紀頃の北インドの字形と異なる点を指摘し、日本に伝わる悉曇写本における表記状況に基づいてそれら問題の字形の由来について考察を加えた。各字形のインド側における状況については不明な部分も残るが、いずれの字形も唐代の中国で使われていたと考えられる。また他資料に引用される『字記』の字形が『字記』諸写本に見られる字形と異なる点についても指摘し、それによって『字記』の成立と伝承に関する新たな仮説を示した。更に本稿での議論全体を通して、悉曇文字の字形面における異同が『字記』や『悉曇藏』をはじめとする悉曇学書の文献学的研究にとって重要な手掛かりの一つになりうることを示すこともできたのではないかと思う。

略号

- 『石山寺』 = 石山寺文化財総合調査団編 1996。
『高山寺』 = 高山寺典籍文書総合調査団 2001。
『悉曇具書』 = 仏書刊行会編 1922。
『集成』 = 梵字貴重資料刊行会編 1980。
『選集』 = 馬淵和夫編 1985。
大正蔵およびT = 高楠順次郎編 1988-1992。
『梵千』 = 東洋文庫監修, 石塚晴通・小助川貞次解題 2014。
DLSC = Bagchi 1929。

参考文献

【和文・中文】

- 石塚晴通 2015. 從Codicology的角度看漢文仏典語言学資料, 徐時儀, 梁曉虹, 松江崇編『仏経音義研究: 第三屆仏経音義研究国際學術研討会論文集』: 332-342頁, 上海: 上海辭書出版社。
- 石山寺文化財総合調査団編 1996. 『石山寺資料叢書 史料篇第一』, 京都: 法蔵館。
- 石山寺文化財総合調査団編 2004. 『石山寺資料叢書 聖教篇第三』, 京都: 法蔵館。
- 易行編輯 2005. 『磧砂大蔵経』 116, 北京: 線装書局。
- 河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著 2001. 『言語学大辞典別巻・世界文字辞典』, 東京: 三省堂。
- 高山寺典籍文書総合調査団 2001. 『高山寺悉曇資料 高山寺資料叢書第二十一冊』, 東京: 東京大学出版会。
- 種智院大学密教学会編 2015. 『新梵字大鑑』, 京都: 法蔵館。
- 住谷芳幸 2008. 円仁『在唐記』の諸本, 『岐阜女子大学紀要』 37: 124-114頁。
- 線装書局影印2004. 『高麗大蔵経』 66, 北京: 線装書局。
- 高楠順次郎編 1988-1992. 『大正新脩大蔵経』 全88卷, 普及版, 東京: 大正新脩大蔵経刊行会。
- 田久保周誉 1972. 『梵文孔雀明王経』, 東京: 山喜房仏書林。

- 田久保周誉・金山正好 1981.『梵字悉曇』, 東京: 平河出版社。
- 中華大藏經編輯局編 1993.『中華大藏經』漢文部分66, 北京: 中華書局。
- 東京大学国語研究室編 1986.『古訓点資料集 1』(東京大学国語研究室資料叢書15), 東京: 汲古書院。
- 東洋文庫監修, 石塚晴通・小助川貞次解題 2014.『梵語千字文／胎藏界真言』(東洋文庫善本叢書 6), 東京: 勉誠出版。
- 沼本克明 2013.『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る——附・半濁点の源流——』, 東京: 汲古書院。
- 橋本貴子 2007. 陀羅尼の音写字から見た次濁鼻音の非鼻音化について, 『中国語学』 254: 124-142頁。
- 干潟龍祥 1939. 仏頂尊勝陀羅尼經諸伝の研究, 『密教研究』 68: 34-72頁。
- 肥爪周二 1995. 悉曇学書に見られるインドの諸方言について——吳音漢音を理解するために——, 『国語学論集 築島裕博士古稀記念』: 775-794頁, 東京: 汲古書院。
- 肥爪周二 2007. [書評] 馬瀨和夫著『悉曇章の研究』, 『日本語の研究』 3 (3): 66-71頁。
- 仏書刊行会編 1922.『大日本仏教全書 30 悉曇具書』, 東京: 大日本仏教全書發行所。
- 梵字貴重資料刊行会編 1980.『梵字貴重資料集成 図版篇・解説篇』, 東京: 東京美術。
- 松田和信 2010. 中央アジアの仏教写本, 奈良康明, 石井公成編『文明・文化の交差点』: 119-158頁, 東京: 佼成出版社。
- 松本照敬 2007.『梵語千字文』の原語比定, 『成田山仏教研究所紀要』 30: 35-101頁。
- 馬瀨和夫 1984.『増訂 日本韻学史の研究 I~III』, 京都: 臨川書店。
- 馬瀨和夫編 1985.『影印注解 悉曇学書選集』 第 1 卷, 東京: 勉誠社。
- 馬瀨和夫 1997. 二つの悉曇章, 『堯栄文庫研究紀要』 1: 1-25頁。
- 馬瀨和夫 2006.『悉曇章の研究』, 東京: 勉誠出版。
- 矢板秀臣 2001. 法隆寺貝葉『般若心經』写本についての一報告, 『智山学報』 50: 7-16頁。
- 兪敏 1984. 梵語千字文校本, 兪敏 1984.『中国語文学論文選』: 254-268頁, 東

京：光生館。

羅振玉 1976.『羅雪堂先生全集・七編第三冊』。台北：台北文華出版公司，台北大通書局。

林光明・林怡馨 2007.『梵字悉曇入門』修訂版，台北：嘉豐出版社。

【欧文】

Bagchi, Prabodh Chandra. 1929, 1937. *Deux lexiques sanskrit-chinois: Fan yu tsa ming de Li Yen et Fan yu ts'ien tseu wen de Yi-tsing*, Sino-indica: Publications de l'Université de Calcutta, 2-3, Paris: Librairie orientaliste Paul Geuthner.

Dani, Ahmad Hasan. 1963. *Indian Palaeography*, Reprint, published in 1986, New Delhi: Munshiram Manoharlal.

Hashimoto, Takako. 2015. Siddham Script in the University of Tokyo Manuscript of the Chinese Version of *Ārya-Mahā-Māyūrī Vidyā-Rājñī*, *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* 18 : 263–273.

Karashima, Seishi. 2012. *Die Abhisamācārikā Dharmāḥ: Verhaltensregeln für buddhistische Mönche der Mahāsāṃghika-Lokottaravādins*, Band III, Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University.

Müller, F. Max and Nanjio, Bunyiu. 1884. *The Ancient Palm-leaves: containing the Pragñā-Pāramitā-Hridaya-Sūtra and the Ushnīsha-Vigaya-Dhāraṇī*, Reprint, published in 2010, Whitefish: Kessinger Publishing.

Sander, Lore. 1968. *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*, Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 8, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Shakyavansha, Hemraj. 1982. *Nepalese Alphabets*, 6th edition, Kathumandu: Basantarāja Tulādhara.



Whitney, William Dwight. 1896. *Sanskrit Grammar*, 3rd edition reprinted in 2003, New York: Dover Publications.

註

- (1) 河野等2001：472（吉田豊氏担当「シッドマートリカー文字」の項）；同書：473（壇辻正剛氏担当「悉曇文字」の項）。なお本稿で言う「北インド」とは、Dani 1963：109–113および上記の文献に倣い、ガンジス河中流域、東インド、西北インド、カシュミールまでを含む地域を意味する。
- (2) 悉曇文字の印字には、中華電子仏典協会が公開しているフォント「Siddham」（Ver1.0, July 1997）を使用した。但し、当フォント中に見当たらない字形の印字には、筆者が自作した画像を用いた。
- (3) 書名で「紀」、「記」と両様の表記が行われる点については『高山寺』：91を参照。馬淵2006：11によると「紀」のほうが古く、版本はすべて「記」と表記するという。本稿では大正蔵に従って「記」と表記する。
- (4) 智広と般若菩提の経歴に関する諸説とその問題点については、種智院大学密教学会編 2015：660–662の解説に詳しい。
- (5) 別系統の音訳漢字とは、智広の言う「余国音（インドの他の地方の発音）」を表したものであるが、肥爪1995が指摘するように「余国音」は実際にはインドの方言音を記述したのではなく、智広が音訳漢字の違いをインドの方言差であると誤解したことに基づく表現であると思われる。「余国音」の最大の特徴は中古音で鼻音であった声母の字が梵語の有声無気音に対応する点にあるが、橋本2007で指摘したように、この種の対応は700年前後から見られるものである。
- (6) 林・林2007はBower Manuscriptおよび円行請来『字記』（実際には『字記』ではない）において[◌]が短iを表す点に注目しているが、現行の悉曇学を受け継がれている長i[◌]という規定については疑問視していない。なお林・林2007は悉曇文字の各字母について10種の悉曇写本の字形を挙げ、うち1種を円行請来『字記』の字形としているが（林・林2007：49）、これは誤りである。林・林2007が各所で円行請来『字記』の字形として挙げている字形は、実際には後で見る東寺金剛蔵第201箱20号のものである。
- (7) 「昌下反」はchaに対する音訳「車」を [tʰa] と読むことを示し、「音近倉可反」は『字記』の著者が聞いた梵語音ではchaが [tʰa] に近く発音されていたことを示している。
- (8) 馬淵2006：11では同時にṇaを表す文字についても掲出字と異体字の字

形が版本系と古写本系で逆になっていることを指摘している。

- (9) 林・林2007：94-95は日本の悉曇学関係の著作において一部chaが𑖇と書かれる点について疑問を呈し、安然『悉曇藏』巻八の字形等を根拠にcha𑖇と書くのが正しいと指摘する。但し『字記』諸写本におけるcha𑖇の表記については気づいていない。安然『悉曇藏』巻八の字形については後述する。
- (10) 『瑜伽金剛頂經釈字母品』の金藏本（中華大藏經編輯局編 1993：297-299）と磧砂藏本（易行編輯2005：563-564）では悉曇文字ではなくナーガリー文字（Nāgarī）が用いられている。そこに見える字形は高麗藏本の字形と系統を異にしており、当面の議論の参考にはならないと思われるため、本稿では取り上げない。
- (11) 書誌情報（古1740-16）では、刊行地、刊行者、刊行年のいずれも未詳とされている。
- (12) 次の研究については未見。이태승・안주호 2004『悉曇字記와望月寺本真言集研究』, 서울：글익는들。
- (13) この資料に含まれるプラークリット語形の中にも短iを𑖇で表記する例が見られる。但し、語頭ではなく、語中のiである。
- 𑖇 (ā)i(śa)「来」（『梵千』11; DLSC: 313, No.22, aiṣa; Bagchi 1937: 432, aiṣa, “venir”）；大正藏本 𑖇 (1190b1)
- 𑖇 (la)i「取」（『梵千』11; DLSC: 313, No.24, lai; Bagchi 1937: 432, lai, “prendre”）；大正藏本 𑖇 (1190b1)
- (14) DLSCが依拠したテキストは安永2年刊本であるが（Bagchi 1937：424），当刊本に類出する誤った表記に対してBagchi氏は括弧書きで訂正を加えている。また高楠順次郎氏に見せてもらった異本（東洋文庫本か）の写真を参照し，異本の表記が敬光本と異なる場合に略称Bを冠してその表記を掲出している。Bagchi 1937：421および449を参照。
- (15) この字が短iに対応する例もある。
- 𑖇 i(dhana)「柴」（『梵千』264; DLSC: 334, No. 173, idhana (indhana)）；大正藏本 𑖇 (1195c9)
- また次の語形は辞書中に見当たらない。
- 𑖇 i(ccha)「豈」（『梵千』183; DLSC: 327, No. 791）

- Bagchi 氏は特に訂正や説明を加えずそのまま *īccha* とローマナイズしている。兪1984：259は *iha na* と訂正し、松本2007は「該当語なし」として原語の比定を行わない（松本2007：65および同書：95）。
- (16) *-i* を表す付加記号は朱筆で加えられている。
- (17) 梵語、漢語共に見せ消ち部分に見える表記である。
- (18) 沼本2013：61には「この本に加えられている朱の仮名字体を見ると平安中期九五〇年前後に位置づけ得る字体であり、慈覚大師請来の正本をその時期に再転写した上に加点したと見るべきように思われる」とある。
- (19) 『集成』図版篇：344-347にも図版あり。
- (20) 『集成』図版篇：52-55にも図版あり。
- (21) 『在唐記』の諸本はいずれも三つの内容を合わせたものであり、うち中間部が字母積となっている。住谷2008は『在唐記』諸本に関する調査報告の中で、『選集』所収の比叡山無動寺藏本（平安末期写）が叡山文庫真如藏本と同一と見られること、そして他本と同じく前半部、中間部の字母積、後半部の三つの内容を合わせたものであることを指摘している（住谷2008：121）。筆者も叡山文庫真如藏本の複写本を実見し、『選集』に比叡山無動寺藏本として収録されている図版が、実際には叡山文庫真如藏本の字母積部分のみを抽出したものであることを確認した。当該写本の所蔵状況についてご教示くださり、資料の閲覧および画像の掲載に関してお世話になった叡山文庫職員の方々に、心より感謝申し上げる。
- (22) 『集成』図版篇：336-339にも図版あり。
- (23) 東京国立博物館のウェブサイト「e国宝」内でも当写本の画像が閲覧可能である（<http://www.emuseum.jp/detail/100625/001/004>（2018年10月25日確認））。
- (24) 『集成』図版篇：152-153には『大悉曇章』の写本で最古とされる東寺金剛藏藏平安中期写本の図版が収録されているが、冒頭の字母配列の体例が『悉曇藏』巻三に記載される『大悉曇章』の体例とは異なる。一方、『大悉曇章』の貞和4年（1348）写本（『集成』図版篇：310-311所収）は冒頭の字母配列の体例が『悉曇藏』巻三の記述と一致しており、安然が見た『大悉曇章』の系統を引くものと思われる。
- (25) 短 *i* , 長 *ī*  という表記は現行の悉曇学に受け継がれているが、今後

は悉曇文字の解説等において、写本では𑖀が短iを表すことがあるとの説明が加えられることを期待する。

筆者は以前東京大学国語研究室蔵『仏母大孔雀明王経』（平安時代後期の書写。東京大学国語研究室編1986：1-208に影印が収録されている）の悉曇文字について一覧表を作成し、発表した（Hashimoto 2015）。だが甚だ遺憾なことに、その時はまだ本稿で扱った問題に気づいておらず、𑖀を長īの欄に置いてしまった。この資料において𑖀の多くが短iに対応することを疑問に思っていたが、『字記』および悉曇文字の解説書において長ī𑖀と規定されていること、写本全体に誤写が多いことから、𑖀が短iに対応するのは𑖀との字形の類似によって生じた誤写と考えたのである。しかし、すでに見てきたように語頭の短iを𑖀と表記することは北インドの字形と一致し、また他の悉曇写本でも行われていることから、誤写ではなく本来の表記を伝えたものと考えられる。よって前稿の𑖀に対する扱いは訂正しなくてはならない。つまり𑖀は短iの欄に置くべきである。また語頭の長īはこの資料において𑖀と書かれるが、前稿ではこの文字を誤って短iの欄に分類した。これは単なる不注意による誤りであり、合わせて訂正する。

- (26) Shakyavansha 1982によるとネパールには悉曇文字とよく似た書体がかつて存在し、その書体では長īが悉曇文字𑖀と同じ字形で書かれるようである（Shakyavansha 1982：39）。但しその字形はShakyavansha氏によって整理された字母表に見えるもので、実際にどのような資料に現れるのかについての情報がShakyavansha 1982には一切無い。長ī𑖀の表記がネパールまたはインドの資料中に実際に確認されるならば、『字記』の長ī𑖀という規定がインド由来である可能性が高まることになるかもしれないが、現時点ではShakyavansha 1982の挙げる字形と問題の字形との関係を論じることは難しい。
- (27) 例えば*Abhisamācārikā Dharmāḥ*の写本では文中の位置に関係なく、語頭のchがcchと表記されている（Karashima 2012：249-252）。梵語写本における語頭chの表記についてご教示くださり、資料をお送りくださった辛嶋静志教授に感謝申しあげる。
- (28) 東京大学国語研究室蔵『仏母大孔雀明王経』の悉曇文字で書かれた陀

- 羅尼においても、直前に語句の切れ目を表す記号があるにも関わらず語頭のchがcchと表記される例が見られる。cchāyānām svāhā（東京大学国語研究室編1986：132；cf. 田久保1972：37, “*chāyānām svāhā*”）。
- (29) 卷八には書写の年月に関する記載がないが、卷一から卷七には応徳2年に書写された旨の奥書がある（『選集』 解題：8）。
- (30) 沼本克明氏は『十八章』と『悉曇藏』 卷八との間に共通点が多く見られることから、『十八章』は安然の著作の草稿本であり、それを淳祐が書写したものが石山寺所蔵の写本であると考えている。更にこの『十八章』は従来その著者について様々に議論されていた『悉曇東記』と同一であると指摘する（『石山寺』：411-435）。しかし、馬淵2006は『十八章』と『悉曇藏』との間に見られる記述上の相違および淳祐の筆癖との相違を指摘して『十八章』は安然の著作ではなく淳祐の書写でもないと主張し、淳祐以前の石山寺の僧侶によって書かれた『悉曇東記』の草稿本であると見ている（馬淵2006：149-163）。
- (31) <http://www.narahaku.go.jp/collection/1307-8.html>（2018年10月25日確認）。
- (32) <https://muishinji.com/collection/>（2018年10月25日確認）。
- (33) 『悉曇具書』の印刷が不鮮明であるため、注釈部分の異体字に関する記述が判読できない。
- (34) 但し写本によっては一部異同があり、高野山大学図書館蔵平安時代写本ではchaが𑖇（『集成』：196）、京都・東寺金剛藏藏貞和3年（1347）写本では長īが𑖇（『集成』：308）と書かれている。

（神戸市外国語大学にて博士（文学）の学位取得）

during the Sino-French War, while ultimate accountability lay with Zeng, Macartney was responsible for: (1) overseeing informal negotiations with agents of the French government; (2) acting as go-between for the Qing Legation with the British Foreign Office when attempting to elicit both formal and informal British assistance; and (3) drawing up all treaty drafts produced by the Qing London Legation in this period.

Moreover, this paper demonstrates how Macartney's bicultural identity and bicultural understanding benefited the Qing side in these negotiations. It argues that Macartney's social standing within European society, and the concomitant personal networks it enabled, helped to initiate the informal negotiations referred to above. It further demonstrates how Macartney's multilingual talents and familiarity with both traditional Chinese and Westphalian systems of interstate relations enabled him, in a last-ditch attempt at achieving rapprochement between the two parties, to clarify for the French side the enigmatic demands of the Qing relating to a purely nominal acceptance of the continuation of the 'suzerain-dependency' relationship between China and Vietnam, after accepting French sovereignty over Vietnam.

The author concludes that Zeng's diplomacy ought to be interpreted in light of these contributions by Macartney.

Some Problems of the *Xitan zi ji* (悉曇字記) Shown by the Forms of Siddham Letters: A Focus on the Letters of the Initial Long *ī*, *cha*, and *ḍha*

HASHIMOTO Takako

The Siddham Script derives from the northern Indian script used from the sixth through the tenth centuries. It was introduced to East Asia along with Buddhism. Zhiguang, an eighth-century Chinese monk, wrote the highly regarded *Xitan zi ji* (悉曇字記, "An Explanation of Siddham Letters") to explain Siddham spelling and pronunciation. However, the forms of the letters representing the initial long *ī*, *cha*, and *ḍha* in the *Xitan zi ji* are different from those used in northern India. According to textual research on Siddham learning in Tang China, the causes and background of the use of these three

forms are considered to be as follows.

This article points out that the letter for the initial long \bar{i} in the *Xitan zi ji* is a letter for the initial short i in northern India and represents the short i in the old Siddham manuscripts. This letter was regarded as the initial long \bar{i} in the *Xitan zi ji* owing to a curious type of Siddham syllabary or to a misunderstanding that arose in Siddham learning in China.

The letter for *cha* is written as *ccha* in the *Xitan zi ji*. This could be because the letter for *cch* was regarded in a particular branch of the Siddham tradition in China as a variant form of *ch* based on Indian orthographical conventions for Buddhist manuscripts in Sanskrit.

One scholarly opinion is that the form of the letter of *dha* in the *Xitan zi ji* is erroneous. Presently, this issue continues to remain unresolved. At least it has been used in Tang China because it appears in some Siddham manuscripts.

Furthermore, this article points out that the forms of these three letters that appear in earlier manuscripts of Japanese Siddham studies that quote from the *Xitan zi ji* sometimes differ from those appearing in the extant *Xitan zi ji* manuscripts. This indicates that there once were versions of the *Xitan zi ji* that differ from the received version.

This article reveals that these three forms were used in Tang China, and that forms of Siddham script can be one of the important clues for studying manuscripts of Siddham studies.

【リポジトリ用ファイル編纂者より注記】

この PDF ファイルの次ページに載る奥付は、本論文に対する訂正記事が掲載された『東洋学報』第 100 巻 4 号の奥付です。

本論文が掲載された『東洋学報』第 100 巻 3 号の奥付とは異なりますので、ご注意ください。

(以上)

訂 正

『東洋学報』第100巻第3号所載

橋本貴子「悉曇文字の字形から見た『悉曇字記』の問題点——語頭の長 i, cha, dha を表す文字の字形を中心に——」

同論文の三五五（010）頁六～七行目は、

誤：『集成』図版篇：2 の図版より字母表中の該当部分を抜粋する⁽²³⁾。

正：東京国立博物館のウェブサイトで無償公開されている画像

(<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0057878/> 2018年10月16日取得)

より字母表中の該当部分を抜粋する（なお、画像はモノクロに変換して掲載している）⁽²³⁾。

同じく三五五（010）頁、表中の欄（6）の出典は、

誤：『集成』図版篇：2

正：上記 URL 画像中下側の貝葉、7 行目

に訂正いたします。

東洋文庫和文紀要

東洋学報 第100巻第4号

2019年3月20日	発行	非売品
編纂者	公益財団法人 東洋文庫	
発行者	東京都文京区本駒込2-28-21	
	公益財団法人 東洋文庫	
	榎原稔	
印刷所	東京都千代田区神田司町2-14	
	富士リプロ株式会社	
発行所	東京都文京区本駒込2-28-21	
	公益財団法人 東洋文庫	

本書は公益財団法人東洋文庫に対する平成30年度文部科学省補助金の一部に依って刊行されたものである。